

誰が為の色に染まりて

櫻井 知愛

○ 農村・全景

田んぼが広がる村の風景。
田植え前の、水が張られた田んぼに人と馬の
姿がある。

○ 馬小屋・中

藁が敷き詰められた狭い馬小屋に一頭の馬。
馬の体のあちこちに火傷の跡。
馬に薬を塗る吉助（きちすけ） 19歳。着物
の裾を上げ、股引きを履いている。
馬小屋の入り口から、こそつと顔を覗かせる
たけ・17歳。着物にたすきをかけ、手ぬぐ
いで姉さん被りをしている。
忍足で吉助に近づき、背後から吉助の首を両
手で掴むたけ。

吉助、咄嗟に肩を上げて

吉助「ひっ！ひやつこい！」

ケタケタ笑うたけ。

吉助「たけちゃん……」

たけ「田んぼから吉さんが見えたものだから。泥だらけの手じや嫌
でしょう？」

吉助、微笑みを浮かべ

吉助「俺はいいさ。でも、こいつの火傷には良くねえな」

たけ、火傷で禿げた馬の頭を撫でる。

馬の首元に下がっている、小さな巾着袋。

たけ「おハゲはまた働けるようになるかしら」

吉助「まだ安心は……。でもあの火事を生き延びたんだ。こいつは
てえしたもんだよ」

たけ「幸運の馬ね」

吉助「たけちゃんのお守りのお陰さ」

たけ、馬に抱擁して

たけ「この子は一生手放しませんからね」

吉助「でも、歳を取ったら働けねえ。若い馬に乗り換えねえと」

頬を膨らますたけ。

吉助「……分かった。お師匠に言っておくよ」

たけ「よ！さすが野馬奉行！」

吉助、少し間を置いて

吉助「……え？俺？」

たけ「そうよ。この前、御用人の方が来てたじゃない。小金牧から

お声がかかったんでしょ？吉さんも、幸運な人ね」

吉助「あれは師匠が口利きしてくれたからで」

たけ「そのお師匠があなたを拾ってくれたんじゃない。私なんて、不運と肩を並べて歩いていくのがさだめなんだわ」

たけの着物の所々に焦げ跡。

吉助「俺からしたら、親がいるたけちゃんの方が幸運さ」

たけ「ほとほとツキのないお家だけどね」

吉助「人にも恵まれてる。この馬小屋だって、村の人たちが建て直してくれたじゃねえか」

たけ「そうね。それに……」

たけ、吉助と視線を合わせて

たけ「吉さんもいるか」

吉助、はにかんで目を逸らす。

たけ、愛おしげに馬を撫でながら

たけ「でも……吉さんは大出世というわけね。博労（ばくろう）から野馬奉行に」

吉助「いや、それはまだ何も……」

たけ「こんな村にはもうおさらばかあ」

吉助、慌てて懷から小さな包みを取り

吉助「た、た、たけちゃん、俺は、まだ見習いの身だ。だけど、もしそうになったら……その時は……」

馬小屋の外から兵五郎（へいごろう）の声。
兵五郎の声「たけー！おい、たけー！」

たけ「おっとうだ。戻らなきゃ」

たけ、吉助に振り返ると声をひそめて

たけ「今夜も夜四つに」

たけ、軽やかに馬小屋を出て行く。

吉助、手の平で紙の包みを開く。

包みの中には赤い櫛簪（くしかんざし）。

○ 畦道

畦道を挟む田んぼでは、馬が馬鍬（まぐわ）を引き、村人が馬の手綱を引き、田んぼの代掻きをしている。馬が固まった土を踏むと、土が細かく碎ける。

畦道を、本を読みながら歩く吉助。

本の表紙には『療馬集大全』の文字。

兵五郎の声「おーい、吉助さん！」

吉助を追いかけて来る兵五郎・40歳と、やす・37歳。

兵五郎「吉助さん、こ、これを……」

やすが風呂敷包みを差し出す。

吉助「兵五郎さん、やすさん、これは？」

兵五郎「いいから、受け取ってくださいえ」

吉助「おハゲの礼ですかい？そんな物は……」

やす「私たちが頂くわけにはいかねえんです！」

やす、吉助に風呂敷包みを力強く押し当てる。

風呂敷包みを受け取る吉助。

吉助「でも……そうだ、じゃあみんなで……」

兵五郎とやすが勢いよく頭を下げる。

兵五郎「吉さん……！すまねえっ！」

吉助「や、やめてくれ、頭上げてくれ、一体どうしたって……」

逃げる様に戻って行く兵五郎とやす。

途中、振り返り吉助に深々頭を下げる。

吉助もつられて頭を下げる。

○ 松戸宿問屋場・前（夕）

宿屋や食べ物屋が建ち並ぶ賑やかな街道。

街道に面した一際大きな建物の前に、忙しい人ばかりと数頭の馬。

背に荷物を下げた馬から別の馬へ、人足の男達が荷物を積み替えている。

吉助、人だかりに誰かを見つけて声を上げる。

吉助「お師匠！源兵衛お師匠！」

積み替えを監視する三橋源兵衛（みはしげん べえ） 45歳。

源兵衛「おう、吉助か。ちょうど良かった」

吉助「お師匠、これ、兵五郎さんに頂いたんですが、どうも饅頭みてえで」

源兵衛「そんな事より、あそこ手貸してやれ」

吉助「へえ」

吉助、源兵衛に風呂敷包みを渡し、荷物を積んだ馬のそばへ。

源兵衛、風呂敷を開くと中に饅頭。

源兵衛「こりゃあいい饅頭だ。吉助、一つもらうぞ」

馬から荷物を一つ下ろす吉助。源兵衛に向けて声を張って

吉助「そりやあもちろん。しかし、なんで兵五郎さんがそんなものを……」

源兵衛「吉助、おめえ、まさか何も聞いてねえのか？」

○ 馬小屋・中（夕）

夕日が差し込む馬小屋、

たけが野草の束を握り、馬に食べさせている。

馬小屋に兵五郎とやすが顔を出す。

兵五郎「たけ、ちよつといいか」

たけ「おっとう、おつかあ、見て。おハゲったら、すごく食欲が出てきたみたい。明日はもっと草刈りしてこないと」

やす「たけ……」

兵五郎とやすの顔を見て、表情が曇るたけ。

○ 松戸宿問屋場・前（夕）

吉助、荷物を肩に担ぎ上げて

吉助「な、何もつてえと？」

源兵衛、饅頭を一口かじって

源兵衛「……兵五郎んとこのお嬢さんな……」

ゆっくり饅頭を咀嚼する源兵衛。

○ 馬小屋・中（夕）

土下座する兵五郎。

やすが泣きながらたけの肩を抱く。

膝から崩れ落ちるたけ。

○ 松戸宿問屋場・前（夕）

源兵衛「……嫁ぎ先が決まったんだよ」

吉助、腕の力が抜け、荷物がずり落ちる。

周りの人足が慌てて荷物を受け止める。

人足の男「おい！てめえ！何しやがる！」

吉助「す、すまねえ……」

吉助、慌てて荷物を馬に乗せると、源兵衛に張り付くように近づいて

吉助「お、お師匠！それはっどういふことですかい！」

源兵衛、饅頭をゆっくり飲み込んでから

源兵衛「この間の小金牧の御用人、連れがいたのは覚えてるか」

吉助「……へえ……」

源兵衛「あのお方は野馬奉行の御子息でな、お前の目利きに興味があつたらしいんだが」

吉助、唾を飲み込む。

源兵衛「えらくお嬢さんを気に入ったそうだ」

吉助「……そいつが……たけちゃんを、嫁に？」

源兵衛「まあ気立てのいいお嬢さんだからなあ」

即座に走り出す吉助。

源兵衛「おい待ちな！どこへ行くつもりだ！」

吉助、足を止めて

吉助「た、確かめねえと！何かの間違いかもしれねえ！」

源兵衛「小金牧まで走ってくつもりか？やめとけ。間違いなんかじゃねえよ」

吉助「そんな……でも……」

源兵衛、吉助の胸に風呂敷を開いたままの饅頭を押しつけて

源兵衛「おめえもあの家の暮らしがどんなもんか、わかってんだろ」

吉助「……でも……」

源兵衛「あいつらにとっちゃ、これは願ってもねえありがてえ話しなんだ」

吉助「俺のせいじゃねえか！俺のせいでたけちゃんが……」
源兵衛「自惚れるな！」

口をつぐむ吉助。

源兵衛「吉、おめえ、俺の顔に泥塗る気か」

唇を噛み締める吉助。

弱々しく饅頭を受け取る。

饅頭が一つ地面にこぼれ落ちる。

源兵衛「けえって来た馬はそろそろ売り時だ。分かったらさっさと

小屋に戻して手入れしとけ」

転がった饅頭が人足に踏み潰される。

潰れた饅頭をじっと見つめる吉助。

○ 畦道（夜）

落ち着きなく立っているたけ。

俯きながらとぼとぼ歩いて来る吉助。

たけの姿に気がついて、足を止める。

たけも吉助に気がついて

たけ「吉さん！」

吉助「……たけちゃん」

たけ、吉助に駆け寄り腕を引く。

吉助「たけちゃん……あの、こんな風に会うのは今日で……」

たけ「いいから早く！おハゲが！」

吉助「えっ？」

吉助、たけと馬小屋へ駆け込む。

○ 馬小屋・中（夜）

火傷を負った馬が藁の上に倒れている。

吉助「お、おハゲ！」

吉助、慌てて馬の体を触る。

吉助「ひでえ熱だ……薬を取って来る。たけちゃんは水を用意して
いてくれ！」

目に涙を浮かべるたけ。

たけ「はい！」

馬小屋を飛び出す吉助。

○ 吉助の部屋・中（夜）

息を切らし、薬箱を持ち上げる吉助。

部屋を出ようとして、足を止める。

ちゃぶ台の上に、赤い櫛簪。

吉助、自分の頬を叩き、部屋を出て行く。

○ 馬小屋・中（夜）

皿の上でローラー形の薬研車を転がし、薬を
砕く吉助。ゴロゴロと音が響く。

手ぬぐいで馬の体を拭くたけ。

たけ「吉さん、おハゲは助かる……？」

吉助「……わからねえ」

たけ、桶の水に手ぬぐいを浸す。

たけ「吉さん、私と……駆け落ちする？」

吉助、薬研車を引く手をピタッと止めて

吉助「たけちゃん……」

ぶんぶんと首を横に振る吉助。

吉助「いけねえ。そんな事できるわけねえ」

たけ「つまらない人」

吉助「お、俺は、馬を裏切れねえ」

たけ「……冗談よ。お嫁に行く事、聞いたんでしょ」

吉助「……ありがてえ話しなんだろ」

たけ「そう思う？」

吉助「たけちゃんにも運が向いてきたって事さ」

たけ、手ぬぐいを力一杯絞る。

たけ「幸運か不運かなんて関係ない。正しい事をするの。それだけのこと」

吉助「……こんなところ、誰かに見られちゃいけねえ。早くけえるんだ。後は任せて」

吉助、ゴロゴロと音を立て薬研車を転がす。

たけ、馬を撫でるように拭きながら

たけ「ねえ吉さん……色だの恋だの、そんな言葉、誰のためにあるのかしらね」

吉助「……さあ、俺には関係ねえ」

たけ、吉助の手を握る。

吉助の手が止まる。

たけ「じゃあ、ここにあるものは、何？」

たけの目を見る吉助。

吉助「……たけちゃん……」

吉助、すぐに目を逸らし、たけの手をどける。

吉助「……ひやつこいよ……」

たけ「ねえ、教えて吉さん。何で言葉で言い表せたら、この気持ち
は救われる？」

吉助「どうにもならねえ事はある」

少しの間、吉助を見つめるたけ。

たけ「……そうね。それじゃあ……お先に出世して来るわ」

黙って薬研車を転がす吉助。

たけ、馬の首元のお守りに触れ、手を合わせて
祈る。

たけ「どうか、自分を責めないで」

たけ、そつと馬に抱擁すると小屋を出て行く。

唇を食いしばり、手を動かす吉助。
馬小屋の中にゴロゴロと音が響く。

○ 馬小屋・外（朝）

静かな朝。馬小屋の屋根に朝日が昇る。

○ 同・中（朝）

野草の束を握り、立ち尽くすたけ。
たけの足元、空になった藁の上に手向けられた花。
花のそばに、馬が首に下げていたお守り。
お守りを手に取り、胸に抱きしめるたけ。
たけの肩が震える。

○ 野道（朝）

荷車を引いている吉助。
荷車には箆（むしろ）を掛けた馬の亡骸。
徐々に吉助の足が止まる。

吉助「……畜生」

吉助、その場に崩れるように膝をつく。
拳で地面を叩く。

吉助「畜生っ」

何度も拳で地面を叩く吉助。

吉助「畜生っ畜生！畜生！」

吉助、その場に泣き崩れる。
吉助の頭の先、広大な草原に向かって、長い
野道が伸びている。